

研究ノート

アル＝ジャズィーラ研究をめぐる方法論的考察

— 新たな分析枠組みの構築に向けて —

千葉悠志*

A Methodological Approach to the Study of Al-Jazeera: Past, Present, and Future

CHIBA Yushi*

Soon after its establishment in 1996, Al-Jazeera emerged as a major international broadcaster. In particular, it attracted global attention by broadcasting exclusive videos of Bin Laden and a series of investigative reports on the wars in Afghanistan and Iraq, and it became a strong competitor of well-known international broadcasters such as BBC and CNN. From late 2010, Al-Jazeera also played an important role in the “Arab Spring.” Al-Jazeera is now the subject of hundreds of studies by numerous researchers. This research note has two purposes. First, in order to suggest future directions for the study of Al-Jazeera, it looks closely at previous studies about the company, points out three developmental stages in these studies, and presents some issues to be solved. Second, it proposes an analytical framework for better understanding of the structural transformation of Al-Jazeera with particular focus on political and economic factors. Although many studies have discussed Al-Jazeera’s political and social impact, studies that explain its structural transformation are inadequate. With reference to political communication theories, this research note attempts to propose better analytical framework for future studies of Al-Jazeera.

1. はじめに

アル＝ジャズィーラ¹⁾ (*al-Jazīra*) は、イギリスのBBCやアメリカのCNNなどと並ぶ国際的な放送局として知られている。1996年にカタルの首都ドーハで設立されたこの放送局は、1998年のアメリカによるイラク空爆や、2000年に勃発した第2次インティファダでのスクープ報道を連発したことで、一躍アラブ内外にその名を轟かせた。2001年にアメリカで同時多発テロ事件が生じると、アル＝ジャズィーラはその首謀者とされたウサーマ・イブン・

* 早稲田大学イスラーム地域研究機構, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University
2016年4月8日受付, 2016年12月5日受理

ラーディン²⁾の声明映像を流し、それに続くアフガニスタン戦争とイラク戦争では欧米メディアが報じぬ戦争被害の実態を生々しく報じたことによって、世界的な名声をも確固たるものにした。さらに2010年末以来の「アラブの春」では、各国の政治変動に大きく関与し、その影響力を遺憾なく発揮した。近年では国際展開にも積極的で、まさにグローバル化時代を象徴する放送局といえるだろう。

こうしたことから、アル＝ジャズィーラをめぐる研究は盛んにおこなわれ、今や汗牛充棟の先行研究が存在する。ただし、研究の進展に伴いアル＝ジャズィーラの諸相が掘り下げて論じられるようになった一方で、近年は研究の細分化が進んだために、その全体像が曖昧になったという印象を禁じ得ない。次節で検討するように、アル＝ジャズィーラに関する初期の研究がアル＝ジャズィーラとは何かという問題を正面から扱ったのに対して、近年の研究は英語専門チャンネルのアル＝ジャズィーラ・イングリッシュやアル＝ジャズィーラとムスリム同胞団、さらにアル＝ジャズィーラと「アラブの春」との関係など、特定の側面に記述を特化させたものが目立つ。しかしながら、アル＝ジャズィーラは主要な政治アクターのひとつとして中東政治にあまりにも深く関与している。現在の混迷を極める中東政治を適切に理解するうえでも、断片的な理解を超えて、その実像を改めて提示することが肝要であろう。

本稿の目的はアル＝ジャズィーラをめぐる先行研究を概観し、その問題点を指摘したうえで、今後これを改めて論じるための分析枠組みを提示することである。その意味では、本稿は今後の研究のための予備的作業に位置付けられよう。アル＝ジャズィーラをめぐるのはこれまで多数の研究がおこなわれてきたが、後述するように先行研究を幅広く概観するような研究レビューは不足している。³⁾そこで、次節においてアル＝ジャズィーラに関する先行研究を整理し、その特徴と問題点を指摘する。第3節では、今後アル＝ジャズィーラを論じるにあたっての新たな分析枠組みを提示する。その際には、とくに政治／マス・コミュニケーション研究の理論を参照しつつも、単に既存の理論をアル＝ジャズィーラに当てはめるのではなく、むしろアル＝ジャズィーラという個別の事例を論じるためのより適切な分析枠組みを提示したい。

2. アル＝ジャズィーラをめぐる先行研究（1996年-2015年）

2.1 全体的傾向

放送開始から1年あまりのアル＝ジャズィーラは、利用可能な衛星トランスポンダ⁴⁾（中継

1) 日本ではアル＝ジャズィーラと表記されることが多い。しかし、本稿ではより原音に近いアル＝ジャズィーラと表記する。なお本稿ではアラビア語を書き下す際に、『岩波イスラーム辞典』[大塚ほか2002]の転写法に従う。

2) 日本では、ビン・ラーディンやビン・ラディンと表記されることが多い。

3) 本稿以外では、先行研究を広く概観した研究レビューに[Nasr 2013; Abdelmoula 2015]がある。

4) トランスポンダとは、トランスミッター（transmitter、送信機）とレスポンド（responder、応答機）の合成語で、地上から送られた電波を受信し、増幅して地上に送り返すための中継器のことである。

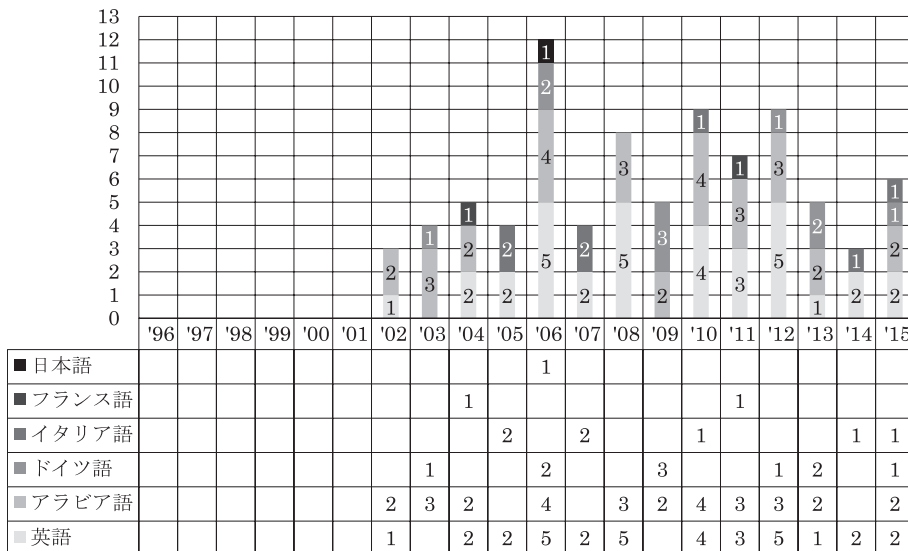


図 1 アル＝ジャズィーラの用語をタイトルに含む書籍数の推移 (1996 年-2015 年)

出所：各種資料をもとに著者作成。

器) が限られていたことから受信世帯が限られた放送局であった。しかし、1997 年 11 月に技術的問題を解決することができたことから、⁵⁾ 一気に広範な視聴者を獲得した。2000 年代以降、中東が国際政治の一角へと深く組み込まれていく過程で、アル＝ジャズィーラに対する注目も急速に高まり、これを扱った記事や論文、書籍などが次々と書かれるようになった。

図 1 は 1996 年から 2015 年までの 20 年間に、英語・アラビア語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・日本語の 6 か国語で著された「アル＝ジャズィーラ」の用語をタイトルに含む書籍を、出版年に応じてグラフ化したものである。主なものだけでも 84 冊が刊行されている。⁶⁾ とくに多いのが英語とアラビア語の書籍であり、それぞれ 34 冊と 30 冊が刊行されてい

5) アル＝ジャズィーラは放送開始にあたって、中東一帯をカバーするアラブサット衛星と契約を結んだ。しかし当初は小型のパラボラアンテナで受信が可能となる Ku バンドのトランスポンダに空きがなく、大型のパラボラアンテナでのみ受信が可能な C バンドのトランスポンダを使用せざるを得なかった。しかし 1997 年 6 月、Ku バンドのトランスポンダを利用していたフランス企業がアラブサット衛星の倫理規約に違反し、契約を解除された。これによりアル＝ジャズィーラは、Ku バンドのトランスポンダの使用が適い、視聴者層の拡大に成功した [マイルズ 2005(2005): 49-51]。

6) アル＝ジャズィーラを主な研究対象として扱っていても主題や副題に「アル＝ジャズィーラ」の文字を含まないものについてはここには含めていない。また、「アル＝ジャズィーラ」の用語が「島」「アラビア半島」の意味で使われているものについても含めていない。ここでの書籍の定義は、1985 年の第 21 回 UNESCO 総会で採択された定義に基づき、「表紙を除いて 49 頁以上の非定期刊行物であり、一般の人々が手に取ることが可能なもの」とした。なかにはアル＝ジャズィーラの文字をタイトルに含んでいても、オンライン事典（具体的には Wikipedia）の内容を単に編集しただけの書籍もあるが、そうした書籍は数には含めていない。ただし電子書籍であっても 49 頁以上で、学術的意義が認められるものについては含めた。翻訳書は数が重複するため含めていない。

る。次いで多いのがドイツ語とイタリア語であり、それぞれ10冊と7冊が刊行されている。これに対して、フランス語や日本語の書籍はそれぞれ2冊と1冊が刊行されるに留まっている。ただし、これは書籍に限定したものであり、アル＝ジャズィーラを主題にした記事や論文は少なくともその十数倍の数が存在しよう。すべてをここで列挙するのは困難なので、以下では主要な書籍や論文を中心に、アル＝ジャズィーラをめぐる先行研究を概観する。その際には、とくに英語・アラビア語・日本語で書かれた先行研究を内容上の特徴に応じて、①1996年-2005年、②2005年-2011年、③2011年-2016年の3期に分けたうえで各時期の研究の特徴を検討する。

2.2 初期の研究（1996年-2005年）

アル＝ジャズィーラが登場した1990年代は、アラブ世界に衛星放送が普及し始めた時期であり、その政治への影響力に注目が集まっていた。背景には、情報技術の発達が国境を超えた情報流通を促し、それが東欧革命やソ連の崩壊を引き起こしたとする見方や、東西対立の終結とともに世界が今後おしなべて民主化するといった楽観的な予測が横たわっていた。アラブ世界でも衛星放送やインターネットが普及の兆しをみせており、新たなメディアが社会へと与えるインパクトに大きな注目が集まっていた [ECSSR 1998; Eickelman and Anderson 1999]。

したがって、アル＝ジャズィーラの登場はまさに時代の要請に応えたもののように思われた。一部の論者は、この新たな放送局がアラブ世界の^{グラスノスチ}情報公開になると考えて次のように論じた。すなわち、アル＝ジャズィーラの登場によって権威主義国家の情報統制は風穴を空けられ、政府の不正が白日のもとにさらされる。またその影響はアル＝ジャズィーラ以外のメディアに広く及ぶことでアラブ・メディア全体の再編を促し、より透明性の高い社会の実現につながる。市民運動がさまざまに行き詰まりをみせるなかで、アル＝ジャズィーラは市民社会の役割を代替し、補完することでアラブ各国の民主化を促す [Friedman 2001; Ghadbian 2001; al-Zaydi 2003]。もちろん、より慎重な見方をする論者も少なくなかったが、⁷⁾ 初期のアル＝ジャズィーラ研究では概して「民主化の担い手」や「市民社会としてのメディア」といったイメージが前景化して語られる傾向があった。⁸⁾

民主化への影響と同様か、あるいはそれ以上に注目されたのはオルタナティブ・メディアとしての役割であった。たとえば第二次インティファダをめぐる報道では、欧米メディアがイ

7) たとえば、アラブ・メディアに関するオンライン・ジャーナル「トランスナショナル・ブロードキャスティング・スタディーズ」(Transnational Broadcasting Studies, TBS) 2001年春・夏号には、「アラブTVニュースのインパクト—2つの見方」と題された特集が組まれ、当時アル＝ジャズィーラのイギリス支局長であったユスリー・ファウダと、アメリカNBCの元カイロ支局長で当時TBSの主任編集長であったアブドゥッラー・シュライファーの論考が掲載されている。ファウダの論考が、アル＝ジャズィーラの革新性をとくに高く評価しているのに対して、シュライファーの論考は、それに一定の留保をつけたものとなっている点で対照的である [Fouada 2001; Schleifer 2001]。なお、ファウダがアル＝ジャズィーラ時代の活動をもとに書いたルポルタージュは、2016年に邦訳され刊行された [フーダ 2016]。

スラエル側とパレスチナ側の双方に被害が出ていることに言及する一方で、アル＝ジャズィーラはパレスチナの窮状や被害の非対称性に焦点を当てるなど、よりパレスチナ側に寄り添った報道をおこなった。また、アフガニスタンとイラクでの戦争報道では、欧米（とくにアメリカ）のメディアが両国の独裁からの解放や民主化の問題に焦点を当てがちであったのに対して、アル＝ジャズィーラは戦争被害や戦後の占領統治の問題などに焦点を当てた。こうしたことから、アル＝ジャズィーラは欧米メディアの情報寡占に風穴を空けた初の非欧米メディアとして高く評価された。ただし、欧米のメディアや識者のなかには、アル＝ジャズィーラの報道を批判的に捉えたものも少なくなかった。

たとえば、アル＝ジャズィーラの放送内容はアラブ民族主義や反米主義、反ユダヤ主義に満ちており [Zakaria 2004: 3]、さらにテロリストを頻繁にスクリーンに映し出すことでテロを助長しているという批判がそうである⁹⁾ [Ajami 2001]。ただし、こうした見方に対しては、アル＝ジャズィーラを擁護する側からの反駁もおこなわれている。たとえば、ムハンマド・ナワウィー¹⁰⁾ とアーディル・イスカンダル¹¹⁾ は、アル＝ジャズィーラがカタール政府に関する報道を意図的に避ける傾向があることを指摘する一方で、「いずれのアラブ政府の意見の延長なわけでも、それを肩代わりしているわけでもない」 [El-Nawawy and Iskandar 2002: 201] と述べて、その報道姿勢を高く評価している。また、彼らはそれぞれのメディアには「文脈に応じた客観性」 (contextual objectivity) があること、それゆえアル＝ジャズィーラが偏向しているという批判を考える際には、今日の国際的な情報秩序が欧米メディアの寡占状態にあることを差し引いて考える必要があることを指摘している [El-Nawawy and Iskandar 2002]。

このように、初期の研究では、民主化やオルタナティブ・メディアといった論点を中心としながらアル＝ジャズィーラについての研究が進められた。アル＝ジャズィーラに対する批判もあったが、学術レベルでは民主化への影響やオルタナティブ・メディアとしての役割を肯定的に論じたものが多かったように思われる。しかし、初期の研究には問題もあった。たとえば、イギリス人ジャーナリストのヒュー・マイルズのルポルタージュは、放送関係者への綿密な取材をもとにしてアル＝ジャズィーラの全容を描き出した力作であり、初期の研究の主要な論点を網羅している。その点で、学術的意義も大きい [マイルズ 2005 (2005)]。しかし、国

8) アル＝ジャズィーラは、その実態を離れてしばしば「民主化の担い手」や「政府から独立したメディア」の象徴となった。たとえば、『アフリカのアル＝ジャズィーラ？—マス・メディアとアフリカのルネッサンス』と題された書籍のなかで、その著者はアフリカにはアル＝ジャズィーラのような透明性の高い国家から独立したメディアが必要だと述べている。だが、アル＝ジャズィーラ自体についてはほとんどなんの考察もおこなっていない [De Goubela 2005]。

9) アラブ・メディアが、反米主義やテロを助長しているという批判自体が、アメリカによる中東政策の「失敗」を他者へと責任転嫁する見方だという指摘もある [Lynch 2006: 21]。

10) クイーンズ大学教授で、国際コミュニケーションと中東メディアの専門家として知られている。

11) サイモンフレーザー大学准教授で、ポストコロニアリズム研究と中東メディアの専門家として知られている。

際政治学者の中西寛がその記述を「時にあらゆる権力に屈しない正義の味方というイメージを強調しすぎる印象」[中西 2005] と評するように、初期の研究ではアル＝ジャズィーラの革新性が強調されるあまり、カタル政府との関係については深く踏み込んだ分析がおこなわれず、権力に対するナイーブな見方の研究が目立った。

2.3 研究の進展 (2005 年-2011 年)

アル＝ジャズィーラをめぐる研究は、その後より批判的な観点からおこなわれるようになった。たとえば、2005 年に刊行された論文集『アル＝ジャズィーラ現象—新たなアラブ・メディアへの批判的考察』は、アル＝ジャズィーラ研究の分水嶺となる一冊である [Zayani 2005]。たとえば、同書にはアル＝ジャズィーラの看板番組「反対方向」(*al-Ittijāh al-Mu'ākis*) の司会者であるファイサル・カースィムの論考が収められている。カースィムはこのなかで、自らの番組を政治的・宗教的信条を異にした出演者が喧々諤々の議論を繰り広げる自由な討論の場であるとして、その重要性を強調している [Kasim 2005]。こうしたカースィムの議論は、初期の研究の延長線上に位置付けられよう。

しかし、同書には「反対方向」をめぐるもうひとつの論考が収められており、こちらが論文集全体の「批判的」傾向を特徴付けている。それは、中東メディア研究の第一人者として知られるアメリカン大学シャルジャ校教授のムハンマド・アーイシュの論考であり、彼は「反対方向」の内容分析をおこなうことで、同番組の流れに一定のパターンがみられることを指摘している。そして、番組内で繰り広げられる議論の過熱化や、それによって生じる討論者たちの罵り合いといったものが誘導されたものである可能性が高いと指摘している。つまりアーイシュは、「反対方向」が理性的討論の場となるよりも、むしろセンセーショナルで視聴率を稼ぎだすための見世物の場に化す傾向があることを指摘している [Ayish 2005]。

このように、2000 年代半ばになるとカタル政府からの独立性を強調するような議論は影を潜め、政治権力との関係を意識しながらアル＝ジャズィーラの政治的・社会的な影響力を改めて検討しようとする研究や、その組織文化を掘り下げて論じることでアル＝ジャズィーラの問題や、放送局とカタル政府との関係に深く切り込むような研究がおこなわれるようになった [El-Oifi 2005; Powers and Gilboa 2007; Fandy 2007; Zayani and Sahraoui 2007; Seib 2008]。あるいは、従来の議論が「反対方向」のような一部の番組だけを取り上げて考察する傾向や、¹²⁾ 衛星放送の民主化への影響を短期的視点から捉えがちであったことを批判し、汎アラブ的な問題一すなわち、パレスチナ問題やイラク戦争といったアラブ世界の共通の話題となりうる問題一についての討議のための政治的アリーナとしての機能や権威主義体制の正統性を掘り崩すメ

12) リンチは、先行研究が「反対方向」ばかりを取り上げて、それをもってアル＝ジャズィーラ全体の傾向に言及する傾向を、「(「反対方向」の司会者であるファイサル・カースィムの名前を借りて)「ファイサル中心主義的な見方」(Faisal Centric View)と呼んで批判している。

カニズム、また政治的デモンストレーション効果などを長期的な観点から考察する必要性が説かれるようになった [Lynch 2005].

実証的な研究が進んだのも、この時期の特徴である。たとえば、アル＝ジャズィーラの登場以降、アラブ民族主義やムスリムとしての意識の覚醒が進んだとする主張は長らくおこなわれてきたが、¹³⁾ 2000 年代半ば以降には、こうした主張をより実証的に論じようとする研究が現れた。たとえば、中東政治を専門とするジョージ・ワシントン大学教授のマーク・リンチは、1999 年から 2004 年までにアル＝ジャズィーラで放送された 5 つのトーク番組を広く分析し、それらが汎アラブ的な問題の議論形成の場として積極的な役割を果たしていたことを指摘した。民主化への影響を肯定的か否定的かで捉えるような従来の二元論的な議論を乗り越えて、アル＝ジャズィーラの政治的機能を実証的に論じた優れた研究であった [Lynch 2006]。彼はアル＝ジャズィーラの登場が、アラブの人々の自由で公開的な政治的討論を可能にし、またエリート層と中間層のあいだでの合意形成が進む可能性をも指摘している [Lynch 2007: 116-117]。このほか、アラブ 6 か国での世論調査の結果を統計手法によって分析し、そこからアル＝ジャズィーラやアル＝アラビーヤ¹⁴⁾ といった汎アラブ的な衛星放送局が、人々の国単位でのアイデンティティを弱める一方、アラブ民族主義やムスリムの連帯といったトランスナショナルな意識の涵養につながると指摘する研究もおこなわれた¹⁵⁾ [Nisbet and Myers 2010]。

さらに、アル＝ジャズィーラをそれ以外の放送局と比較しながら論じる研究が現れるのも、この時期の特徴である。たとえば、アル＝ジャズィーラの報道傾向を BBC や CNN などの他の国際的な放送局と比較分析した研究が書かれた [Painter 2008; Musolff and al-Zuweiri 2008; Barkho 2009; Al-Om 2010; El-Ibiary 2010; Lahlali 2011; Abdelghanie 2011]。また、アル＝ジャズィーラが 2006 年に英語チャンネルを立ち上げると、アラビア語チャンネルと英語チャンネルの違いを比較するような研究も書かれている [Uysal 2008]。アル＝ジャズィーラとそれ以外の放送局の放送内容を、批判的言説分析 (Critical Discourse Analysis, CDA) に基づきながら分析した研究 [Barkho 2009; Lahlali 2011] がおこなわれたことなどは、批判的・実証的研究の進展をよく示している。まとめると、2000 年代半ば以降、アル＝ジャズィーラをめぐる研究は初期の研究と比べてより批判的かつ実証的な立場から、さらに比較の視点も取り入れな

13) メディアとアラブ民族主義との関係が言及される際には、アル＝ジャズィーラの前駆としてナセル期のエジプトにおける国際放送「アラブの声」(*Sawt al-'Arab*) が引き合いに出されることも多い。しかし、「アラブの声」がナセルという特定の人物や、その政治的主張であるアラブ社会主義の思想と不可分に結びついていたのに対して、アル＝ジャズィーラは特定の人物やイデオロギーとは一対一には対応していない。また、グローバルな特徴とローカルな特徴がまじりあった「グローカル」なアイデンティティを人々に惹起するとする議論もある [Rinnawi 2006; James 2006]。

14) 2003 年にドバイで開始されたサウディアラビア資本の民間ニュース専門チャンネル。

15) ただし近年の議論では、娯楽放送などを取り上げてみた場合、汎アラブ的な衛星放送にはむしろ国単位のナショナリズムを強める側面があることも指摘されている [Kraidy 2010]。

がらおこなわれ大いに進展した。

2.4 「アラブの春」以降のアル＝ジャズィーラ研究（2011年-2016年）

2010年末以来の「アラブの春」において、アル＝ジャズィーラは大きな役割を果たした。とりわけ2011年のはじめに起きた、チュニジアとエジプトの「革命」を考えると、アル＝ジャズィーラの役割は、ときにソーシャル・メディア以上に重要であった [千葉2012]。しかし、その後の報道をめぐるのは、たとえばシリアにおけるデモの規模や死者をめぐる過大・過剰な報道 [青山2012: 85; Salama 2013: 43]、リビアでの反体制派への肩入れ報道 [Al-Nahed 2015]、さらに「革命」後のエジプトでのムスリム同胞団への肩入れ報道 [Iskandar 2015: 158; Hassan 2015: 195]などにみられるように、アル＝ジャズィーラは以前にも増して事実歪曲や扇動的な報道をおこなうようになったと指摘されている [保坂2014: 97; Salama 2013: 42]。またアル＝ジャズィーラの総局長職に初めて王族が就任したことや、カタール政府およびアメリカ政府との密接な関係を裏付けるような機密文書がウィキリークス (WikiLeaks) から流出したことによって、その評判はかつてなく揺らいだ。

こうしたことから多くの論者がアル＝ジャズィーラの報道を問題視し、その変容を指摘するようになった。たとえば、かつて「新たなアラブの公共圏」 (new Arab public sphere) の形成に果たしうるアル＝ジャズィーラの役割を高く評価していたリンチでさえ、近年は放送局の変容を手厳しく評している。彼は「エジプトでの成功がアル＝ジャズィーラの経営陣を慢心させた」 [Lynch 2012: 90] としたうえで、「カタールの王族が、アル＝ジャズィーラをこれまで長らく評価され、名声を博してきた独立のシンボルとしてではなく、むしろ地域政治の有用な武器として利用し始めた」と確信するに十分な、いくつもの理由が存在する」 [Lynch 2012: 90] と述べている。同様に、ビールゼイト大学教授でメディアと文化研究を専門としているワリード・シュラファーも、アル＝ジャズィーラが従来のような「言葉の力」 (*suḥṭa al-khiṭāb*) に基づく放送局から、「力の言葉」 (*khiṭāb al-suḥṭa*) を発する放送局へと変容したと指摘する [al-Shurafā 2013]。

しかし、アル＝ジャズィーラを一枚岩とみなすことや、カタールの完全な「走狗」とみなして、その独立性を否定することは正しくない。最新の研究に基づけば、しばしば一枚岩的に語られがちなアル＝ジャズィーラのなかにも、アラビア語と英語のチャンネルとでは報道をめぐる方針に大きな違いがあることが指摘されている¹⁶⁾ [Powers 2012; Figenschou 2013]。またアル＝ジャズィーラをカタール政府の従順な「走狗」とみなすことも、問題を単純化しすぎてい

16) 一方のアラビア語チャンネルは、アラブ世界の出来事を中心に持ち上げて報道するのに対して、他方の英語チャンネルはアラブ世界の出来事に加えて国際的に重要なニュースを数多く持ち上げて報道するという違いがある。また前者のスタッフがアラブ人を中心に構成されているのに対して、後者のスタッフは欧米のスタッフや、あるいは欧米で教育を受けたアラブ人から構成される。英語チャンネルは、アラビア語チャンネルに比べて、より欧米の視聴者向けに制作されている。

る。アル＝ジャズィーラとカタール政府との関係は一枚岩ではない。とくにハマド前首長からタミーム首長へと首長位の移譲がなされた 2013 年以降には、アル＝ジャズィーラと政府とのあいだで温度差のようなものもみられる [al-Sa‘ūdi October 8, 2015; 千葉 2017: 50-51]。アル＝ジャズィーラはカタールのシンボルとしての役割を果たしており、逆にこのことによってカタール自体も、アル＝ジャズィーラからの影響を受けていると考えられる [Powers 2012: 11]。ゆえに、アル＝ジャズィーラの能動性を無視することは、放送局とカタール政府との関係の適切な把握を妨げよう。アル＝ジャズィーラは今や主要な政治アクターのひとつとして中東政治に深く関与している。アル＝ジャズィーラをめぐるステレオタイプを取り除き、その実像を把握することは、今日の中東政治を読み解くうえでの鍵となる。

それでは近年の研究は、アル＝ジャズィーラの実態をどれほど明らかにしてきたのか。とりわけ「アラブの春」以降に書かれた研究は、アル＝ジャズィーラとは何かという大文字の問いを立てることを避けて、特定の問題や側面に焦点を絞ったうえで、それらを掘り下げて論じる傾向にある。たとえば、アル＝ジャズィーラの一部門であるアル＝ジャズィーラ・イングリッシュについての研究 [Firdous 2012; Seib 2012; Figenschou 2013] や、アル＝ジャズィーラが「アラブの春」で果たした役割やその報道傾向についての研究 [Miladi 2012; al-Zufayri 2012; Bridges 2013; al-Nahed 2015] がおこなわれる一方で、アル＝ジャズィーラの全体像を明らかにするような研究は不足している。また、それぞれのトピックに関しても論点が分かれたままである。たとえば、アル＝ジャズィーラ・イングリッシュの政治的機能に関して、それを「和解を促すメディア」(conciliatory media) と論じる研究 [El-Nawawy and Powers 2010; El-Nawawy 2012] がある一方で、それを真っ向から否定する研究 [Gilboa 2012] もあり、議論が堂々巡りしている。¹⁷⁾ アル＝ジャズィーラ研究所の局長を務めるアブドゥルマウラーの研究 [Abdelmoula 2015] は、アル＝ジャズィーラの政治的役割に関する先行研究の議論をまとめてはいるものの、カタール政府との関係については(おそらく意図的に)言及を避けており、その全体像を論じるための新たな分析枠組みも提示してはいない。まとめると、近年のアル＝ジャズィーラ研究は細分化の傾向が著しく、それゆえその全体像がみえにくくなっている。いうならば、全体像を欠いたままに、特定のテーマに関する個別的・実証研究が進められているのである。

2.5 日本におけるアル＝ジャズィーラ研究

日本におけるアル＝ジャズィーラをめぐる研究状況にも触れておきたい。2000 年代以降、日本でもアル＝ジャズィーラに関する論文がいくつも書かれている。たとえば、NHK 放送文化研究所の主任研究員であった太田 [2001] やジャーナリストの小倉 [2001] らによって書

17) [El-Nawawy and Powers 2010; El-Nawawy 2012] と [Gilboa 2012] の議論は、ともに実証的研究の試みでありながらも、対照的な結論を導き出している。

かれた論文は、世界的にみてもかなり早い段階で書かれたアル＝ジャズィーラ論であり、2003年にはアラビア語の翻訳者であり、アル＝ジャズィーラの日本語翻訳にも関わった新谷 [2003]が、その著書『イラク再生－アラブ・メディアがもたらす民主化』の多くの記述をアル＝ジャズィーラに充てている。¹⁸⁾ 2005年には、アル＝ジャズィーラに関する2冊の洋書が邦訳されて刊行されたほか、¹⁹⁾ その翌年にはアル＝ジャズィーラを主題とする和書も刊行されている [石田ほか 2006]。

ただし、日本語で書かれた研究の大半には、アル＝ジャズィーラに関する初期の研究に特徴的であった権力に対するナイーブな視点が目立つ。もちろん、そうでない研究もなかったわけではないが、全体としてはアル＝ジャズィーラを国家権力から距離を置くことに成功した独立のメディアや、「南北」の情報格差は正に寄与しうる革新的なメディアとしてヒロイックに描く傾向が顕著であった。こうした日本におけるアル＝ジャズィーラの研究状況を、中東地域研究者の臼杵陽は以下のように述べて痛烈に批判している。

「アル・ジャジーラ論がこのところ日本語という媒体でも掃いて捨てるほど垂れ流されている。ほとんどが『アラブのCNN』式の代替メディアとしての役割の説明であり、とりわけマスメディア論を専門とする研究者の議論ほどこのような傾向が強い。そして多くの人々がドーハ参りを行い、そのような評価を再生産し、アル・ジャジーラも大いにそのような『参拝者』を好待遇して利用しつつ、その評価を国際的に高めていくという情宣戦術を駆使している²⁰⁾」 [臼杵 2006: 180]

臼杵の指摘は、日本におけるアル＝ジャズィーラ研究がアラブのメディアが権力政治の産物という視点を欠いていることを批判し、その問題点を的確に言い表している。ただし、彼の指摘がその後の日本の研究で十分に活かされてきたとは言い難い。なぜならば、2000年代半ば以降になると、日本でアル＝ジャズィーラが論じられること自体がほとんどなくなってしまったからである。²¹⁾ これは、現在に至るまでアル＝ジャズィーラの研究が継続しておこなわれてきた海外の研究状況とは対照的といわざるを得ない。それゆえ、日本でアル＝ジャズィーラが

18) 日本では、2001年から2002年に書けての時期には、スカパー！（SKY PerfecTV!）を通じて、一部放送を視聴することができた。

19) [ラムム 2005(2004); マイルズ 2005(2005)]。

20) 同様の指摘は、海外の研究でも指摘されている。つまり、アル＝ジャズィーラがイメージ向上戦略として、訪問者歓迎の姿勢をみせつつも、実際には欧米メディアと比べて、情報公開に積極的でないことが指摘されている。また、関係者へのインタビューをおこなっても、ウェブサイト上に掲載された公式見解以上の情報を得ることがなかなか難しいことが指摘されており、そうしたことからアル＝ジャズィーラの閉鎖性を説く論者もある [Zayani and Sahraoui 2007]。

21) 2006年以降の研究としては、たとえば [太田 2006a, 2006b]。

言及される際には、未だに「中東の革新的な放送局」や「独立系メディア」、「オルタナティブ・メディア」というような十年一日のごときステレオタイプな理解が目立つ。逆に、「アラブの春」以降になると、そうしたイメージの裏返しといえる、「カタルの走狗」といった固定的な理解がみられるのである。

2.6 アル＝ジャズィーラ研究の課題

ここまで、過去 20 年間におこなわれてきたアル＝ジャズィーラに関する先行研究を概観した。単一の放送局が、短期間にこれほど数多く論じられたことは過去にも類例がないのではなかろうか。それゆえ、アル＝ジャズィーラをめぐる研究状況は、すでに汗牛充棟の感を呈しつつある。しかし、実際にはいくつかの課題も残されている。以下では、アル＝ジャズィーラに関する今日の研究の問題点と、それらを踏まえたうえで今後のアル＝ジャズィーラ研究の方向性を示したい。

第 1 に、細分化が進む近年の研究状況を鑑みると、海外の最新の研究動向を踏まえたうえで、アル＝ジャズィーラを再び「統合的な観点」から捉え返すことが必要であろう。前節で検討したように、とりわけ近年の研究には、アル＝ジャズィーラ・イングリッシュだけを取り上げて検討したものや、アル＝ジャズィーラが特定の出来事をいかに報じたのかを論じたもの、またアル＝ジャズィーラの組織構造を論じたものなど、アル＝ジャズィーラの特定の側面に焦点を絞った研究が目立つ。もちろん、こうした個別的・実証的研究の進展自体は歓迎すべきものではあるが、同時にアル＝ジャズィーラをとりまく政治、カタルをとりまく国際関係、経済、他局との関係、組織構造といったそれぞれのアクター同士の関係性に着目し、それがアル＝ジャズィーラの全体をいかに規定するのかといった観点から研究を進めることも必要なのではなかろうか。そうすることで、2011 年以降のシリア報道をひとつ取り上げてみても、単にそれをアル＝ジャズィーラがシリアの紛争をいかに報道したのかといった観点からだけでなく、なぜアル＝ジャズィーラが反体制側に加担するような報道を積極的におこなったのかといった問題をより多面的に考察することが可能になると考えられる。

第 2 に、アル＝ジャズィーラを、中東の権力政治のなかに位置づけながら論じることで、その実像を把握し、ステレオタイプな理解から抜け出すことが求められる。しばしばメディアは国家権力を監視する「番犬」(watch dog)、あるいはその逆のイメージである「愛玩犬」(lap dog) などと呼ばれてきた。しかし、メディアと権力との関係は絶えず揺れ動く関係にあり、両者を一義的な関係として捉えることはできない。アル＝ジャズィーラとカタルの関係も固定的なものではありえず、その時々政治状況に応じて絶えず変化し続けている。さらに、それは国内の政治権力との関係のみならず、放送局や、それが位置する国家をとりまく国際関係のあり方にも大きく左右される。もちろん、こうした視点は、なにもアル＝ジャズィーラに限らず、世界各地の放送局を論じるうえでも重要な視点といえよう。ただし、従来のメディア・コ

コミュニケーション研究においては、特定のメディアを国内的な文脈から扱うのみで、それを国際的な文脈まで踏まえて論じることはほとんどおこなわれてこなかった [千葉 2014]。近年では、こうした従来のメディア・コミュニケーション研究に対する問題意識から、トランスナショナルな視点に立脚したメディア・コミュニケーション研究が意識しておこなわれつつある。アル＝ジャズィーラとカタルとの関係やその政治的役割を、固定的・静態的なイメージをもって語ることなく、むしろそれらをアル＝ジャズィーラやカタルをとりまく国際政治の動態と十分に関連付けながら論じる必要がある。

第3に、これは日本のアル＝ジャズィーラ研究に限ったことではあるが、日本では2000年代半ば以降になると、ほとんどアル＝ジャズィーラについての研究がおこなわれていない。それゆえ海外の最新の研究動向や、以上に記したような論点を踏まえたうえで、アル＝ジャズィーラについての最新の研究をおこない、その成果を日本語で社会に還元することが重要であろう。中東の権力政治の産物として登場し、さらに現在の中東政治へと大きな影響力を及ぼすアル＝ジャズィーラの実像を示すことは、従来の「中東の革新的放送局」や「独立系メディア」、「オルタナティブ・メディア」といったステレオタイプを覆すことに寄与し、さらにそこから日本における中東研究およびメディア・コミュニケーション研究の一層の発展に寄与するものとなりうる。以下では、こうした視点を踏まえつつ、アル＝ジャズィーラを新たに論じるための分析枠組みを試論的ではあるが提示してみたい。

3. アル＝ジャズィーラを論じるために一政治コミュニケーション研究とその応用

3.1 「放送局」を論じる際の2つのアプローチ

アル＝ジャズィーラのような特定のメディアを論じようとする場合、どのような分析枠組みを参照するのが適当か。新聞や通信社、放送局などのジャーナリズム組織を論じる研究分野としては、一般にジャーナリズム研究が知られている。ただし、従来のジャーナリズム研究が、しばしば規範的・倫理的な研究に陥りがちであったことを批判的に捉えて、近年ではむしろジャーナリズムを「コミュニケーションという社会過程を権力の配分・維持・変動にかかわる現象として捉える視座を前面に打ち出」[大石 2005: 10] すとする政治コミュニケーション研究やマス・コミュニケーション研究の立場から捉え返す必要性が説かれている。したがって、アル＝ジャズィーラを論じるための分析枠組みの構築にあたっては、まずは政治／マス・コミュニケーション研究の理論を参照するのが適当であろう。

政治／マス・コミュニケーション研究の立場から、ジャーナリズムを社会との関係に着目して論じる場合、既存の研究アプローチを極端に単純化すれば、それは2つに大別できるのではなかろうか。²²⁾ 第1に、ジャーナリズムの組織構造やニュースの生産過程、また産出された(文字、音声、映像などを広く含む)テキストを分析するという、いわば「内向きの研究」で

ある。第 2 に、オーディエンス分析や効果研究、ジャーナリズムの政治的影響力や社会的機能、国際的な情報流通におけるオルタナティブ・メディアとしての役割の分析をおこなうなどの、いわば「外向きの研究」であり、これはジャーナリズムの組織やテキストよりも、その政治社会的影響に主眼を置いた研究である。これまでのアル＝ジャズィーラ研究を鑑みると、多くの研究は、前者ではなく後者を中心に進められてきた。

これに対して、前者の研究－アル＝ジャズィーラ自体の構造や、それをとりまく権力関係についての実証的研究－は、刻々と変わりゆく現実の変化に追いついておらず不足している。しかし本来ならば、「マス・メディアの情報が形成される際に働く諸力を理解することなしに、マス・メディアの効果を十分に理解することはできない」[Shoemaker and Reese 1996: 258; 大石 2005: 93] はずである。それゆえアル＝ジャズィーラから社会への影響よりも、まずもってアル＝ジャズィーラ自体の構造や、それを規定する諸力の解明に努めることが先決なのではなかろうか。以下では政治／マス・コミュニケーション研究の先行研究で示された理論を援用しながら、アル＝ジャズィーラをより適切に理解するための分析枠組みを探っていききたい。

3.2 ジャーナリズムに対する諸力についての研究

ジャーナリズム組織を、その効果よりもむしろ情報が形成される際に働く諸力に着目して論じる研究－いわば前節の「内向きの研究」－は、組織構造やニュース（より広くはメディア・コンテンツ全般）の生産過程に焦点を当てるマクロなアプローチと、産出された（文字、音声、映像を含む）テキストを分析する内容分析や批判的言説分析などのミクロなアプローチに大別できよう。とくに「ニュースの生産過程に対する諸力に関する研究は、『ジャーナリズムと権力問題』の中心に位置し、これまでもさかんに行われてきた」[大石 2005: 27]。一方で、後者のテキスト分析は、その性質上、複数のチャンネルやウェブサイトを傘下に置くような放送ネットワークの全容を明らかにするうえでは必ずしも適していない[Barkho 2009: 53-58]。近年はマクロなアプローチとミクロなアプローチを統合する方法論的探求もおこなわれてはいるものの、²³⁾ 課題も指摘されており、²⁴⁾ ほとんどの研究はマクロかミクロのいずれかのアプローチに傾斜している。本稿では個々のテキスト分析よりも、むしろアル＝ジャズィーラの組織構造や、ニュース（広くはメディア・コンテンツ全般）の生産過程、さらに組織をとりまく諸力の構造を明らかにすることを目的に掲げて、マクロなアプローチに限定して考察を進

22) サリー大学上級講師のポール・ホドキンソンは、「マスメディアのコンテンツを社会との関係で扱うシンプルかつ対照的な 2 つのアプローチ」[ホドキンソン 2016: 4] として、「メディアが配信するコンテンツが人々と社会の未来とに影響する力を持つもの」として、メディアを構築主体ないし〈形成主体 shaper〉と見なすアプローチと、「メディアがわれわれをどのように形成するかではなく、社会をどのように〈反映するか〉、そのあり方に着目する」アプローチの 2 つを指摘する。前者は、本稿で指摘する「外向きの研究」に、後者が「内向きの研究」に相当するものと考えられる。

23) たとえば、[大石 2005] を参照。

24) 批判的言説分析の問題点については[Barkho 2009: 53-58] がまとまっている。

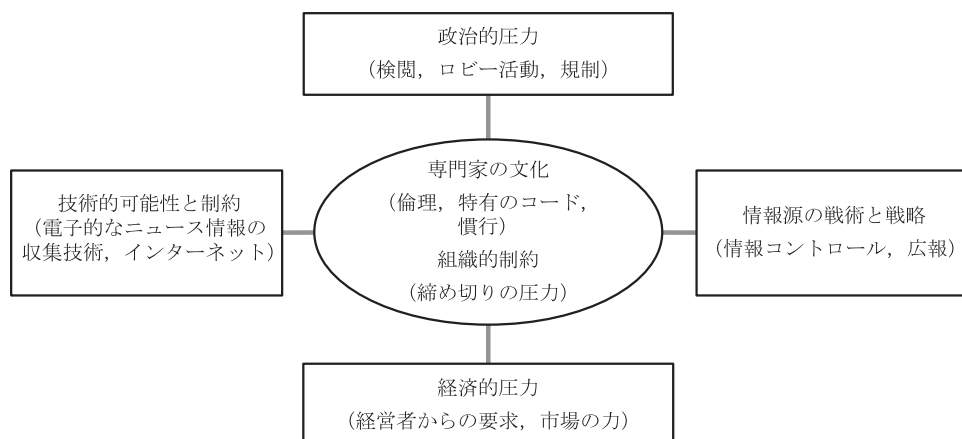


図2 ジャーナリズムに対する社会的影響要因

出所：[マクネア 2006; 大石 2005: 27]

める。

とりわけ、ここではジャーナリズムをめぐる政治社会的考察をおこなうブライアン・マクネアによって提起されたモデルを参照しながら、ジャーナリズムとそれに関係した諸力について考察をおこなう。図2は、マクネアによる「ジャーナリズムに対する社会的影響要因」を図式化したものである[マクネア 2006]。図にみられるように、マクネアはあるジャーナリズム機関を考察する際に、5つの諸力に着目することを提唱している。²⁵⁾

第1に、新聞社や通信社、放送局などの特定のメディアを分析するうえでは、組織文化や組織構造を明らかにすることが重要である。あるメディア・コンテンツが産出される際に、ジャーナリストと経営陣の関係、また組織的構造を明らかにすることが重要である。さらに組織の倫理や特有のコード、ジャーナリストらの日常的実践、報道への向き合い方などもメディア・コンテンツの内容に影響を及ぼす。

第2に、政治的圧力を考察することが必要である。政府による検閲や情報統制、情報操作、さらには政治文化や政治体制の影響を考察する必要がある。政治的圧力は国営メディアだけでなく、民間のメディアにも及ぶ。アル＝ジャズィーラを含めたアラブ世界のメディアを考える場合には、政治的圧力への理解はとりわけ重要である。

第3に、経済的圧力を考察する必要がある。長らくアラブ世界のメディアは国家の管理下に置かれており、メディアの民営化が他の地域と比べて遅れてきた。しかしながら、1990年代以降に衛星放送が現れ、さらに2000年代以降になると各国でメディアの民営化が進んだ。

25) なお、マクネアのモデルのより詳細な説明については[大石 2005: 27-28]を参照されたい。

それによって、現在のアラブ世界ではメディア同士の競争が激化している [千葉 2014].

第 4 に、技術的可能性と制約を考慮する必要がある。情報の収集や生産にとって必要な技術の有無が、メディア・コンテンツの内容へと及ぼす影響は大きい。本稿の冒頭で触れたように、アル＝ジャズィーラも開始当初は利用可能なトランスポンダが限られていたために、その影響力が限定されていた。ただし、放送衛星や通信衛星が多数打ち上げられ、さらに政府からの補助金によって最新の設備の導入が可能なアル＝ジャズィーラは、技術的可能性に関しては他のメディアよりもより有利な状況に置かれているとも考えられる。

第 5 に、情報源の戦術と戦略を考えることが重要である。「ジャーナリズムの言説は、ジャーナリズム以外の行為者（たとえば、政治家、圧力団体の活動家、警察や労働組合などの公的組織、映画やスポーツの有名人）の情報活動によっても形成される」[大石 2005: 28]。たとえば、2011 年以降のシリアでの報道に際しては、アル＝ジャズィーラは放送内容の大部分をシリア国民がスマートフォンなどで撮影した映像に大きく依拠している。

このように、ジャーナリズムをマクロな観点から論じる際には、「専門家の文化、組織的制約」、「政治的圧力」、「経済的圧力」、「技術的可能性と制約」、「情報の戦術と戦略」といった要因に着目することが有効であると考えられている。ただし、以上のモデルはジャーナリズムをマクロな観点から論じるための一般モデルであり、さらにそれぞれのアクターがどのような関係性にあるのかが明白ではない点に課題が残るといえようか。また新たな理論が既存の理論と個別の事象の検討の双方の歩み寄りから導かれるとするならば、アル＝ジャズィーラの分析により適する個別的なモデルを構築することも意義あることと思われる。そのため、以下ではアル＝ジャズィーラを論じるにあたってより個別の文脈に基づくモデルを提示すべく、今少し考察を進めてみたい。

3.3 「カフィール」と「ワドゥウ・アル＝ヤド」

アル＝ジャズィーラを論じるうえで、より個別的なモデルとはどのようなものか。この際、「シャルク・アウサト」²⁶⁾ 紙の常連コラムニストとして知られ、中東の政治とメディアとの関係に造詣が深いマアムーン・ファンディーの議論がひとつの参考になるだろう。彼は、アル＝ジャズィーラを含むアラブ世界の（マス）メディアを理解するうえでは、「カフィール」(*kafil*) と「ワドゥウ・アル＝ヤド」(*wad' al-yad*) という 2 つの概念を踏まえることが重要だと述べる。前者は、「庇護者、保証人」などの意味するアラビア語であり、ここでは具体的にメディアの所有者を意味するとされる。後者は、「その場に座り込むこと、用益権を申し立てること」などの意味するアラビア語であり、ここでは特定のメディアに雇われて働くジャーナリストたちが、自らの判断である程度自由に報道をおこなうことを意味するものと定義される。ファン

26) 1978 年にロンドンで創刊されたアラビア語の新聞であり、アラブ世界で広く読まれる。

ディーは、カフィール同士の対立が存在するときには、メディアのあり方は決定的にカフィール同士のロジックに左右され、逆に対立が存在しないときや対立が弱いときには、被雇用者であるジャーナリストらのロジックがメディアのあり方を決定すると述べる [Fandy 2007].

ファンディーの指摘に従うならば、アラブの放送を考える場合、その所有者をとりまく権力関係の分析が最優先におこなわれる必要がある。また、従来の政治／マス・コミュニケーション研究における政治経済学アプローチは、メディアと国家権力との関係を国内的な文脈に限定するかたちで考察を進める傾向があった。しかし、ファンディーの指摘を受けるならば、アラブ・メディアの分析にあたってはカフィール同士の対立を国内的文脈に限定して考えるのではなく、国際政治の文脈にまで拡大して考えることも必要であろう。アル＝ジャズィーラの分析にあたって、その庇護者たるカタルの国内的文脈と、さらにはカタルの置かれた国際政治の文脈の双方を踏まえることが肝要となる。

それでは、カフィールのシステムに次いで重視されるワドゥウ・アル＝ヤドの論理—すなわちメディア内部の論理—とはどのようなものか。しばしば一枚岩的に語られがちなアル＝ジャズィーラのなかにも、アラビア語チャンネルと英語チャンネルでは報道姿勢に大きな違いがあることが指摘されている [Figenschou 2013]。また、アラビア語チャンネルに限ってみても、組織内部に複数のイデオロギーが併存し、異なる政治力学が作用している。たとえば、アル＝ジャズィーラの内部には、「アラブ民族主義者」(Arabist)、「イスラーム主義者」(Islamist)、「リベラル主義者」(liberalist) という異なる3つの潮流があると述べる説がある [El-Oifi 2005: 73]。また、「イスラーム主義者」(Islamist)、「世俗主義者」(secularist)、「民族主義者」(nationalist) という3つの異なるイデオロギーが内部に存在するという説もある [Zayani and Sahraoui 2007: 40]。近年では、「アラブ民族主義者」(Arabist)、「イスラーム主義者」(Islamist)、「リベラル主義者」(liberalist)、「左派」(leftist) の4つの潮流があるという説も出されている [Abdelmoula 2015: 120]。アル＝ジャズィーラを考えるうえでは、こうしたアル＝ジャズィーラ内部の構造やパワー・バランスを踏まえることが肝要であろう。

ファンディーのモデルの優れた点として、以下の2点を指摘したい。第1に、ファンディーのモデルは、アラブのメディアを分析する際に、国内的な文脈のみならず、それを国際関係の文脈にまで拡大して分析する必要性を強調している点である。「アラブ域内政治」という用語があるように、アラブの政治はしばしば、それぞれの「内政」と非アラブ国との場合に成立する厳密な意味での「外交」のあいだに、「アラブ内政」と呼びうるものが存在する [小杉 2006: 308]。アル＝ジャズィーラを論じる際にも、カタルの国内事情のみならずアラブ（さらに広くは中東）の域内政治や国際政治の影響を考察する必要があるだろう。第2に、アラブ・メディアを極めて政治的な問題として扱う必要性を強調している点である。先に触れたマクネアのモデルにおける、「技術的可能性と制約」や「情報源の戦術と戦略」などについても、ア

ラブの場合かなりの部分が政治的な問題に回収されがちである。

ただし、ファンディーのモデルをアル＝ジャズィーラの分析に応用しようとするならば、修正すべき点もある。第 1 に、ファンディーのモデルでは、マクネアのモデルで指摘されていた「経済的圧力」の要因が抜け落ちている。確かに、アル＝ジャズィーラを含むアラブのメディアの多くは、その所有者からの資金的援助を受けており、メディアをめぐる市場の影響を強く受けにくいとも考えられてきた。しかし、2000 年代以降、アラブ・メディアには市場競争の原理が急速に浸透し [千葉 2014]、そしてその影響はアル＝ジャズィーラにも例外なく及んでいる [Lynch 2006: 23]。ゆえに、アル＝ジャズィーラを考察するにあたって、経済的圧力の存在を十分に考慮に含めるべきである。第 2 に、ファンディーのモデルでは、「カフィール」から「ワドゥウ・アル＝ヤド」への一方的な影響が想定されており、「ワドゥウ・アル＝ヤド」の論理が、「カフィール」へと及ぼす逆向きの影響については触れられていない。「カフィール」の論理、「ワドゥウ・アル＝ヤド」の論理、さらには「経済」的な論理をそれぞれ別個に検討するのではなく、それらの動態に着目し、むしろアクター同士の関係性が全体をいかに規定しているのかという観点から考察を進めることが必要であろう。第 3 に、ファンディーのモデルは、アラブのメディアという広範かつ漠然とした対象を指定したものである。ゆえに、ファンディーのモデルをアル＝ジャズィーラのような特定のメディアの分析に援用する際には、当該メディアが置かれた個別的な文脈を考慮したうえで、修正を図る必要がある。

3.4 アル＝ジャズィーラを論じるための分析モデル

以上で論じたマクネアのモデルやファンディーのモデルなどを参考に、ここでは今後アル＝ジャズィーラを論じるにあたってのひとつの分析枠組みとして、図 3 のようなモデルを提起してみたい。このモデルは、アル＝ジャズィーラを理解するうえで、第 1 に、「カタルの政治と、カタルをとりまく国際政治」という政治的要因、第 2 に、「アル＝ジャズィーラ内部の力学」という組織的要因、第 3 に、「競合メディア」の存在という市場的要因という 3 つの要因、そしてそうしたアクター同士の関係性こそがアル＝ジャズィーラのあり方を規定すると想定するものである。

まず、アル＝ジャズィーラを理解するためには、「カタルの政治と、カタルをとりまく国際政治」を理解することが肝要である。アル＝ジャズィーラはカタル政府からの独立を強調している。しかし、実際には、「カタルの国王が望めば一夜にしてなくなる」[Figenchou 2013: 23]といわれるほどに、両者の関係は緊密であり、国家権力がアル＝ジャズィーラへと影響を行使するルートはさまざまに存在している。たとえば、アル＝ジャズィーラの歳入のほとんどは政府からの補助金であり、その経営陣（7 名）は、カタルの最高評議会（*Majlis al-Shūrā*）の指名で決定される。また、カタル政府や外国政府からの放送内容の変更や自粛要請はこれまでもしばしばおこなわれており、アル＝ジャズィーラもそうした要請に応じて内容上の変更・自

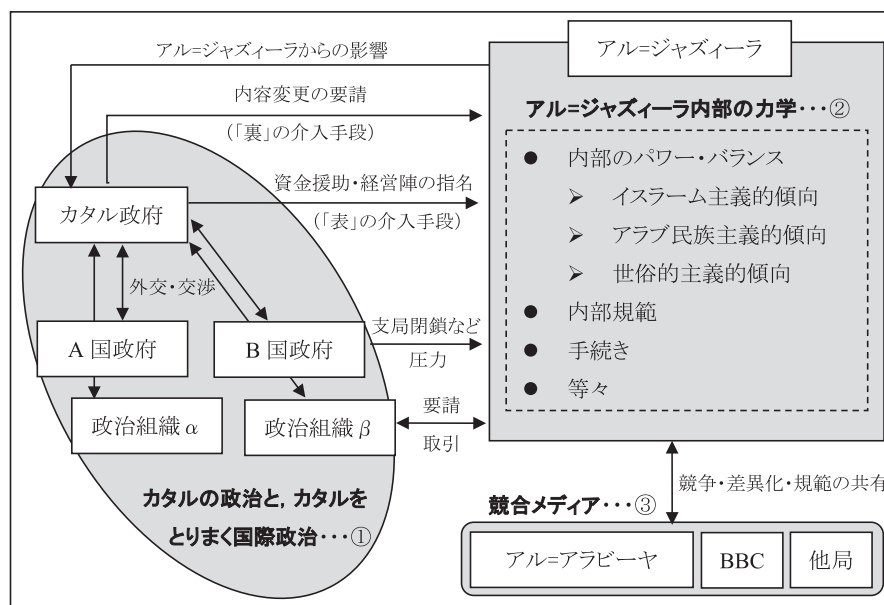


図3 アル＝ジャズィーラを規定する力学とその関係性

出所：著者作成。

粛などをたびたびおこなってきた。このことは、外部の観察者だけでなく、アル＝ジャズィーラ内部のジャーナリストからも指摘されていることである [Kühn *et al.* 2013].²⁷⁾ 換言すれば、アル＝ジャズィーラは、その誕生から一貫してカタールの外交カードに利用されてきた。²⁸⁾ 一方、アル＝ジャズィーラからカタール政府への影響も存在する。たとえば、アル＝ジャズィーラは2010年末以来の中東における政治変動の主な原動力であったが、そうして新たに形成された国際政治のあり方が、翻ってカタール政府の政策を大小に規定している。政府からアル＝ジャズィーラへの一方的な影響だけでなく、その逆の影響についても考慮すべきである [Powers 2012: 11].

次に、アル＝ジャズィーラの組織的な要因も十分に考慮すべきである。たとえば、2003年から2011年にかけて、組織のリーダーであったワッダーフ・ハンファル (Waddah Khanfar) のもとでアル＝ジャズィーラはイスラーム主義的な傾向を強め、そうした組織のあり方がアル＝ジャズィーラの報道のあり方を大きく決定したことは疑い得ない。たとえば、2011年以降のアル＝ジャズィーラは、エジプトやシリアなどでイスラーム主義組織への明白な肩入れ報道

27) このことは、また2016年2月18日に著者がドーハ市内でおこなったアル＝ジャズィーラのジャーナリストへのインタビューからも裏付けられる。なおジャーナリストの氏名については、本人の希望により匿名とする。

28) 2014年にカタールがエジプトとの外交関係を回復した際、それまでエジプトへの批判的報道をおこなってきたアル＝ジャズィーラ・エジプトが廃止されたことなどは、外交カードとしてのアル＝ジャズィーラの側面をよく示すものである。

をおこなった。こうした背景にはアル＝ジャズィーラ内部のパワー・バランスが、イスラーム主義を支持するものにとって有利な状況に形成されてきたことがあった [千葉 2017: 51]。政府からの圧力は特定の報道を隠蔽するうえでは効力を発揮するかもしれない。しかし、アル＝ジャズィーラがなぜ特定の報道を積極的におこなうかを考えるにあたっては、政府からの圧力よりも、むしろアル＝ジャズィーラ内部の力学を十分に考慮する必要があるだろう。また、アル＝ジャズィーラは 2006 年以降、それまでのアラビア語チャンネルに加えてドキュメンタリー・チャンネル、英語チャンネルなどの複数のチャンネルを開始し、組織の拡大を図ってきた。それによってアラビア語チャンネルと英語チャンネルのあいだには、大きな亀裂が生じたとも指摘されている。それゆえアル＝ジャズィーラが今日、組織としていかに内部の統一を図っているのかなども十分に検討が必要である。²⁹⁾

さらに、「競合メディア」の存在も考慮する必要もあるだろう。アル＝ジャズィーラは歳入の多くをカタル政府からの補助金に頼っている。しかしながら、アル＝ジャズィーラが影響力の大きなメディアとしてあり続けるためには、他メディアに対する優位を維持しなくてはいけない。そのためには他局との過酷な競争に勝ち抜かねばならない。あるアル＝ジャズィーラのジャーナリストは、著者とのインタビューのなかで「血が流れればトップニュースになる」³⁰⁾ (*if it bleeds, it leads*) という言葉に象徴されるセンセーショナリズムと商業主義的論理が、アル＝ジャズィーラの番組作りにおいても大いに働いていると述べた。³¹⁾ もちろん、競合メディアの存在は先に指摘したような「カタルの政治と、カタルをとりまく国際政治」の影響と比べて、比較的弱い影響力と考えられるかもしれない。しかし、政治的圧力が弱い場合には、「アル＝ジャズィーラ内部の力学」や「競合メディア」の存在がその報道のあり方の基底要因として働くと考えられる。

アル＝ジャズィーラを論じるにあたって、このような複数の要因を設定することのメリットはどこにあるのか。それは複数の要因を設けることで、単一の要因をもってすべてを論じるような「決定論」や「本質論」を回避し、よりその実像に迫ることができる点にある。以上のような複数のアクターを設定し、その関係性を分析することによって、その時々のあるいはそれぞれの出来事に応じたアル＝ジャズィーラの行動をある程度一貫した立場から読み解くことが可能になると考えられるが、そうした具体的な分析は今後、アル＝ジャズィーラの具体的な報道を素材として検討していきたい。

29) アル＝ジャズィーラのアラビア語チャンネルと英語チャンネルとのあいだのアイデンティティの違い、また両者の確執の解決がいかに図られたかについては以下が詳しい [Powers 2012: 19-20]。

30) センセーショナルなニュースがより多くのオーディエンス（視聴者）を引き付けるとする商業主義傾向を象徴する用語。

31) 2016 年 2 月 18 日にドーハ市内でおこなったアル＝ジャズィーラのジャーナリストへのインタビューより。

4. お わ り に

本稿ではアル＝ジャズィーラについての先行研究を整理するとともに、今後の研究において考慮されるべき諸論点を指摘し、そのうえでより統合的な観点からアル＝ジャズィーラを論じていくための分析枠組みを提起した。本稿で設定した分析枠組みをもとに、設立以来のアル＝ジャズィーラの歩みを一貫した立場から読み解く作業は今後の課題としたい。

引 用 文 献

日本語

- 青山弘之. 2012. 『混迷するシリアー歴史と政治構造から読み解く』岩波書店.
- 石田英敬・中山智香子・西谷 修・港 千尋. 2006. 『アルジャジーラとメディアの壁』岩波書店.
- 臼杵 陽. 2006. 「変容するメディアとアラブ政治」『現代思想』34(4): 176-184.
- 大石 裕. 2005. 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房.
- 太田昌宏. 2001. 「アルジャジーラと中東メディア環境」『放送研究と調査』52(6): 68-75.
- _____. 2006a. 「中東メディアの国際情報発信とその政治的背景」渡邊光一編『マスメディアと国際政治(国際関係学叢書10)』南窓社, 105-131.
- _____. 2006b. 「アルジャジーラ, 10年の歩みと新たな戦略—中東ジャーナリズムが問いかけたもの」『NHK放送文化研究所年報』50: 125-164.
- 大塚和夫・小松久男・羽田 正・小杉 泰・東長 靖・山内昌之編. 2002. 『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
- 小倉孝保. 2001. 「注目集める衛星テレビ アルジャジーラ—タブーに挑戦する自由な報道姿勢で支持を獲得」『新聞研究』604: 43-46.
- 小杉 泰. 2006. 『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.
- 新谷恵司. 2003. 『イラク再生—アラブ・メディアがもたらす民主化』第三文明社.
- 千葉悠志. 2012. 「衛星放送こそが『アラブの春』の仕掛け人」『季刊アラブ』141: 20-21.
- _____. 2014. 『現代アラブ・メディア—越境するラジオから衛星テレビへ』ナカニシヤ出版.
- _____. 2017. 「メディア—設立から二〇年, アルジャジーラとカタール」『アジア研ワールドトレンド』256: 50-51.
- 中西 寛. 2005. 「(書評) アルジャジーラ—報道の戦争」『BOOKAsahi.com』2005年10月23日. <<http://book.asahi.com/reviews/reviewer/2011072700630.html>> (2016年2月5日)
- フーダ, ユスリー. 2016. 『危険な道—9.11首謀者と会った唯一のジャーナリスト』師岡カリマ・エルサムニー訳, 白水社. (Fawda, Yusrī. 2015. *Fi Ṭariq al-Adhan: min Ma'āqil al-Qā'ida ilā Hawāḍin Dā'ish*. Dāral-Shrūq: al-Qāhira.)
- 保坂修司. 2014. 『サイバー・イスラーム—越境する公共圏』山川出版社.
- ホドキンソン, ポール. 2016. 『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』土屋武久訳, ミネルヴァ書房. (Hodkinson, Paul. 2011. *Media, Culture and Society: An Introduction*. London: Sage Publication Ltd.)
- マイルズ, ヒュー. 2005. 『アルジャジーラ—報道の戦争』河野純治訳, 光文社. (Miles, Hugh. 2005. *Al-Jazeera: How Arab TV News Challenged the World*. London: Avacus.)
- マクネア, ブライアン. 2006. 『ジャーナリズムの社会学』小川浩一・赤尾光史訳, リベルタ出版. (McNair, Brian. 1998. *The Sociology of Journalism*. London and New York: Arnold.)
- ラムルム, オルフア. 2005. 『アルジャジーラはどういうテレビ局か』藤野邦夫訳, 平凡社. (Lamloum,

Olfa. 2004. *Al-Jazira, miroir rebelle et ambigu du monde arabe*. Paris: Découverte.)

英語・アラビア語

- Abdelghanie, Ennam. 2011. *Al-Jazeera and NHK Coverage of the 2003 Iraq War: A Content Analysis-based Comparative Study of Arab and Japanese Media Models*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing.
- Abdelmoula, Ezzeddine. 2015. *Al Jazeera and Democratization: The Rise of the Arab Public Sphere*. London: Routledge.
- Ajami, Fouad. 2001 (November 18). What the Muslim World is Watching, *The New York Times*. <<http://www.nytimes.com/2001/11/18/magazine/what-the-muslim-world-is-watching.html>> (January 22, 2015)
- Ayish, Muhammad I. 2005. Media Brinkmanship in the Arab World: Al Jazeera's The Opposite Direction as a Fighting Arena, In Mohamed Zayani ed., *The Al Jazeera Phenomenon: Critical Perspectives on New Arab Media*. Boulder: Paradigm Publishers, pp. 106-126.
- Barkho, Leon. 2009. *News from the BBC, CNN, and Al-Jazeera: How the Three Broadcasters Cover the Middle East*. New Jersey: Hampton Press.
- Bridges, Scott. 2013. *18 days: Al Jazeera English and the Egyptian Revolution*. Braddon: Editia.
- De Goubela, Philip Fiske. 2005. *An African Al-Jazeera? Mass Media and the African Renaissance*. London: Foreign Policy Center.
- ECSSR (The Emirates Center for Strategic Studies and Research). 1998. *The Information Revolution and the Arab World: Its Impact on State and Society*. Abu Dhabi: ECSSR.
- Eickelman, Dale F. and Jon W. Anderson eds. 1999. *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere*. Bloomington: Indiana University Press.
- Fandy, Mamoun. 2007. *(Un)Civil War of Words: Media and Politics in the Arab World*. Westport: Praeger Security International.
- Figenschou, Tine Ustad. 2013. *Al Jazeera and the Global Media Landscape: The South is Talking Back*. New York: Routledge.
- Firdous, Taira. 2012. *Al Jazeera English: An Alternative News Voice: Presenting a Non Western Perspective and Ending Western Media Hegemony*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing.
- Fouda, Yosri. 2001. Al-Jazeera: Here We Stand; We Can Do No Otherwise, *TBS Archive* 6. <<http://tbsjournal.arabmediasociety.com/Archives/Spring01/Jazeera.html>> (March 28, 2016)
- Friedman, Thomas L. 2001 (February 27). Foreign Affairs: Glasnost in the Gulf, *The New York Times*. <<http://www.nytimes.com/2001/02/27/opinion/foreign-affairs-glasnost-in-the-gulf.html>> (March 28, 2016)
- Ghadbian, Najib. 2001. Contesting the State Media Monopoly: Syria on Al-Jazira Television, *Middle East Review of International Affairs* 5(2): 75-87.
- Gilboa, Eytan. 2012. Covering Gaza, 2008-2009: An Israeli View. In Philip Seib ed., *New Media and the New Middle East*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 143-162.
- Hassan, Abdalla F. 2015. *Media, Revolution and Politics in Egypt: The Story of an Uprising*. London and New York: I. B. Tauris.
- El-Ibiary, Rasha. 2010. *One War, Two Televised Worlds: Comparative Analysis between Al-Jazeera and CNN in Covering the 2003 Invasion of Iraq*. Saarbrücken: Lambert Academic Publishing.
- Iskandar, Adel. 2015. Free? Not So Fast! The Fourth Estate Flourishes and Falters with the Arab Uprisings. In Fahed Al-Sumait et al. eds., *The Arab Uprisings: Catalysts, Dynamics, and Trajectories*. New York

- and London: Rowman & Littlefield, pp. 155-173.
- James, Laura M. 2006. Whose Voice? Nasser, the Arabs, and 'Sawt al-Arab's Radio, *TBS Archive* 16. <<http://www.tbsjournal.com/James.html>> (April 10, 2011)
- Kasim, Faisal. 2005. The Opposite Direction: A Program which Changed the Face of Arab Television. In Mohamed Zayani ed., *The Al Jazeera Phenomenon: Critical Perspectives on New Arab Media*. Boulder: Paradigm Publishers, pp. 93-105.
- Kraidy, Marwan. 2010. *Reality Television and Arab Politics: Contention in Public Life*. New York: Cambridge University Press.
- Kühn, Alexander, Christoph Reuter and Gregor Peter Schmitz. 2013 (February 15). Al-Jazeera Losing Battle for Independence: After the Arab Spring, *Spiegel Online*. <<http://www.spiegel.de/international/world/al-jazeera-criticized-for-lack-of-independence-after-arab-spring-a-883343.html>> (January 22, 2015).
- Lahlali, El-Mustapha. 2011. *Contemporary Arab Broadcast Media*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Lynch, Marc. 2005. Assessing the Democratizing Power of Satellite TV, *TBS Archive* 14. <<http://tbsjournal.arabmediasociety.com/Archives/Spring05/lynch.html>> (March 23, 2015)
- _____. 2006. *Voices of the New Arab Public: Iraq, Al-Jazeera, and Middle East Politics Today*. New York: Columbia University Press.
- _____. 2007. Talk Shows and the Arab Public Sphere. In Philip Seib ed., *New Media and the New Middle East*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 101-118.
- _____. 2012. *The Arab Uprising: The Unfinished Revolutions of the New Middle East*. New York: Public Affairs.
- Miladi, Nouredine. 2012. *Al Jazeera and the Arab Revolution: Public Opinion, Diplomacy and Political Change*. Bristol: Intellect.
- Musolff, Andreas and Abdel-Mutaleb al-Zuweiri. 2008. The Milestone Metaphor: CNN and al-Jazeera Discourse on the Iraq War. In Mahjoob Zweiri and Emma C. Murphy eds., *The New Arab Media: Technology, Image and Perception*. Southern Court: Ithaca Press, pp. 31-46.
- al-Nahed, Sumaya. 2015. Covering Libya: A Framing Analysis of Al Jazeera and BBC Coverage of the 2011 Libyan Uprising and NATO Intervention, *Middle East Critique* 24(3): 251-267.
- Nasr, Sara. 2013. *Academic Research about Al Jazeera: PhDs, Masters, Books & Research Papers 1996-2012*. Doha: Al Jazeera Center for Research.
- El-Nawawy, Mohammed and Adel Iskandar. 2002. *Al-Jazeera: How the Free Arab News Network Scooped the World and Changed the Middle East*. Cambridge: Westview Press.
- El-Nawawy, Mohammed and Shawn Powers. 2010. Al-Jazeera English: A Conciliatory Medium in a Conflict-Driven Environment? *Global Media and Communication* 6(1): 61-84.
- El-Nawawy, Mohammed. 2012. AJE's Conciliatory Role: Covering the "Ground Zero Mosque" Controversy. In Philip Seib ed., *New Media and the New Middle East*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 162-185.
- Nisbet, Eric C. and Teresa A. Myers. 2010. Challenging the State: Transnational TV and Political Identity in the Middle East, *Political Communication* 27(4): 347-366.
- El-Oifi, Mohammed. 2005. Influence without Power: Al Jazeera and the Arab Public Sphere. In Mohamed Zayani ed., *The Al Jazeera Phenomenon: Critical Perspectives on New Arab Media*. Boulder: Paradigm Publishers, pp. 66-79.
- Al-Om, Tamara. 2010. *Constructing Reality: The Palestinian Israeli Conflict: A Comparison of Al Jazeera, BBC and CNN*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.

- Painter, James. 2008. *Counter-Hegemonic News: A Case Study of Al-Jazeera English and Telesur*. Oxford: Reuters Institute for the Study of Journalism.
- Powers, Shawn and Eytan Gilboa. 2007. The Public Diplomacy of Al Jazeera. In Philip Seib ed., *New Media and the New Middle East*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 53-80.
- Powers, Shawn. 2012. The Origin of Al Jazeera English. In Philip Seib ed., *Al Jazeera English: Global News in a Changing World*. New York: Palgrave Macmillan, pp. 5-28.
- Rinnawi, Khalil. 2006. *Instant Nationalism: McArabism, al-Jazeera and Transnational Media in the Arab World*. Lanham: University Press of America.
- Salama, Vivian. 2013. Al-Jazeera's (R)Evolution?. In Adel Iskandar and Bassam Haddad eds., *Mediating the Arab Uprisings*. Washington, DC.: Tadween Publishing, pp. 39-46.
- Schleifer, Abdallah. 2001. Looks Are Deceiving: Arab Talk Shows and TV Journalism, *TBS Archive* 6. <<http://tbsjournal.arabmediasociety.com/Archives/Spring01/Jazeera.html>> (March 28, 2016)
- Seib, Philip ed. 2008. *New Media and the New Middle East*. New York: Palgrave Macmillan.
- _____. ed. 2012. *Al Jazeera English: Global News in a Changing World*. New York: Palgrave Macmillan.
- al-Shurafā, Walīd. 2013. *al-Jazīra wa al-Ikhwān: min Sulṭa al-Khiṭāb ilā Khīṭāb al-Sulṭa*. 'Ammān: Dār al-Fāris al-Nashr wa al-Tuẓī'.
- Shoemaker, Pamela J. and Stephen D. Reese. 1996. *Mediating the Message: Theories of Influences on Mass Media Content*. London: Longman.
- Uysal, Ahmet. 2008. The New Frontier in International Politics: The Nature of al-Jazeera's Prime-time Broadcasting in Arabic and English. In Mahjoob Zweiri and Emma C. Murphy eds., *The New Arab Media: Technology, Image and Perception*. Southern Court: Ithaca Press, pp. 1-18.
- Zakaria, Fareed. 2004. Islam, Democracy, and Constitutional Liberalism, *Political Science Quarterly* 119: 1-20.
- Zayani, Mohamed ed. 2005. *The Al Jazeera Phenomenon: Critical Perspectives on New Arab Media*. Boulder: Paradigm Publishers.
- Zayani, Mohamed and Sofiane Sahraoui. 2007. *The Culture of Al Jazeera: Inside an Arab Media Giant*. North Carolina and London: McFarland & Company.
- al-Zaydi, Mufid. 2003. *Qanāt al-Jazīra: Kasr al-Muḥarramāt fī al-Faḍā' al-I'lāmī al-'Arabī*. Bayrūt: Dār al-Ṭalī'a li-l-Ṭibā'a wa al-Nashr.
- al-Zufayrī, 'Alī. 2012. *Bayna al-Jazīra wa al-Thawra: Sanawāt al-ya's wa Riyāḥ al-Taghyīr*. Bayrūt: al-Shabaka al-'Arabīya li-l-Abḥāth wa al-Nashr.

オンラインニュース

- Reuter <<http://in.reuters.com/>>
2016 (March 27). Qatar's Al Jazeera network laying off 500 employees.
- al-Sa'ūdī <<http://www.thesaudi.info/>>
2015 (October 8). Amīr Qaṭar al-Sābiq Yunqidhu "al-Jazeera" min Tūfān 'Azīmī.